

THE SHINGASHI BASIN NEWS

新河岸川流域しんぶん



発行●新河岸川流域川づくり連絡会 新所沢事務所
住 所●埼玉県所沢市弥生町2956-6 山口ビル1F TEL/FAK 042-994-3212
発行日●2001年(平成13年) 3月8日



新河岸川流域フォーラム 特集

- P1 新河岸川流域フォーラム報告
- P2 講演『環境学習における地域の連携と役割』
- P3 流域での活動事例紹介
- P4 第1分科会『流域から学ぶ、まちづくり・川づくり』
- P5 第2分科会『安全に遊び、学ぶために』
- P6 第3分科会『子どもたちからの提案』
- P7 第4分科会『学校の取り組みと、川に学ぶプログラム』

新河岸川流域情報

- P8 新河岸川流域
春のイベント情報



切絵 毛利将範

新河岸川流域フォーラム

テーマ 川と流域に学ぶ社会

2月18日に開催された新河岸川流域フォーラムでは、280名の参加者とともに流域での活動情報を発表し合い、地域での学習をふまえた、これからの川づくり・まちづくりについて積極的な提案が出されました。

また、フォーラムを通じて築かれた新しいつながり、を育みながら、新河岸川流域での継続的な活動の必要性が確認されました。

今回の「里川」では、その報告と今後の展望を特集します。

開催記録

開催日：平成13年 2月18日 日曜日
開催場所：清瀬市民センター
参加者数：280名
主催：新河岸川流域総合治水対策協議会
新河岸川流域川づくり連絡会

プログラム

あいさつ	荒川下流工事事務所 泊 宏氏 清瀬市 市長 星野 繁氏
講演	講師：阿部 治氏『環境学習における地域の役割と連携』
流域での活動事例紹介	コーディネーター：森 良氏 『川から学び、川づくり・まちづくりの輪を広げよう』
昼食	昼食及び展示物の見学
移動	分科会への移動案内
分科会	第1分科会『流域から学ぶまちづくり、川づくり』
	第2分科会『川で安全に遊び、学ぶために』
	第3分科会『子どもたちからの提案』
	第4分科会『学校の取り組みと、川に学ぶプログラム』
報告と総評	各分科会コーディネーターからの報告、総評(阿部 治氏)
閉会	

講演

テーマ：環境学習における地域の役割と連携

講師：阿部 治 氏（埼玉大学教育学部助教授）

なぜ今、環境教育や総合学習が必要なのか。それは現在の様々な社会問題と密接に関わっています。地域に根ざした子どもたちの活動は、持続可能な社会を実現する重要なキーワードです。



写真：講師 阿部 治 氏

■ 総合学習の体制

総合学習や環境学習に関して様々な視点で体制づくりが進められています。例えば、中央教育審議会、生涯学習審議会、河川審議会、中央環境審議会などから答申が出されています。特に環境省の自然体験活動推進協議会は、関係団体が連携し、自然体験を積むための機会の提供や支援をしようとするもので、近い将来、子供たちの自然との触れ合いをサポートする体制ができるはずです。

■ 総合学習の背景、 「持続できない社会」の問題

私たちが置かれている社会は、環境、開発、資源エネルギー、人口、食糧、貧困、人権、平和などの問題を抱えており、更に各問題は密接に関わり合っています。また世界的な問題に限らず、日本にも食品、高齢化や少子化の問題などもあり、状況は深刻です。先行き不透明な社会では夢も持てず、このままでは社会を持続することが難しいのが現状です。

■ 「持続可能な社会」へむけての視点

「持続可能な社会」へ転換するための3つの視点が上げられます。

- ① 「自然」：生きていくための生存基盤、生態学的な持続性。これは更に「循環の問題」と「生物の多様性の確保」の2点を挙げるができます。
- ② 「社会」：家族、地域を核とした社会、文化、経済の問題、つまり社会の持続性。
- ③ 「人間」：人間関係や自然との関係が希薄の中で起こる精神の問題。これらを具体化の中で、持続可能な未来を作り上げていくのです。

■ 「環境教育」＝ 「持続可能な社会に向けた活動」

前述の3つの視点は、様々な体験を通した他者との「つながり」が基本にあります。持続可能な未来に向けて、新たな「つながり」を考え、作り上げていくこと、つまり人と人、人と自然との関係を変えていくことが大事なのです。持続可能な未来を志向した環境教育というのは「つながり」を中心に据えた活動で自分と他者や自己を結び結び、その「つながり」を意識化させる営みなのです。

■ なぜ「総合学習」が必要なのか？

生きる力が失われている人たちが、特に子供たちが増えている今、生きる力を子供たちが育むために「総合的な学習の時間」が文部省より出されました。生きる力とは、自分と他者や自然、他の生き物、自己との関係を改善していく力のことです。つながり教育というより広い環境教育への視点からの取り組みです。

■ 環境教育と地域づくり

環境教育には、自然にかかわる活動の「自然系の環境教育」と、生活における活動の「生活系の環境教育」、さらに「地球系の環境教育」があります。これらを含むものとして、環境教育の視点、つまり持続可能な社会にむけた視点に立った地域づくりが位置付けられます。

■ 総合学習の目的

環境教育の視点は、総合学習のテーマとしても挙げられています。これらの課題はすべて相互に関係しており、切り口が異なっても根本的に

は持続可能性の問題です。総合学習は広義での環境教育と言えます。つまり、つながりの関係を意識し、自己を肯定してもらう、そして自分達が動けば社会が変わるという意味で子供の社会参画を促すことに総合学習のねらいがあるのです。

■ 「探検、発見、ほっとけん」

総合学習を通して、子供たちは身近なテーマを見つけ、地域に出て様々なことを探検し、発見します。すると、このままほっとくと大変なことになる、何とか解決しなければならぬ物事に会い、「ほっとけん」ということになります。この「探検、発見、ほっとけん」の繰り返しで、まさに総合学習の取り組みで、子供は自分たちが動けば社会が変わるという確信を持つようになります。そうすることで子供が元気になる、さらに大人もそれに励まされ、夢のある社会、持続可能な社会をつくりあげることができるのです。

■ 持続可能な社会にむけての革命

総合学習を進めていくには、地域やNGOの協力が欠かせません。まだ、大きな課題は幾つもありますが、総合学習が地域から定着すれば、持続可能な社会に向けて一種の革命が起こせる可能性は十分あります。



写真：会場風景

流域の活動事例紹介

テーマ：川から学び、川づくり・まちづくりの輪を広げよう

コーディネーター：森 良 氏（環境教育情報センター事務局長）

パネリスト：相馬 和彦（不老川流域川づくり市民の会）
松尾 初美（砂川掘流域川づくり懇談会）
宮本 善和（柳瀬川流域川づくり市民懇談会）
菅谷 輝美（黒目川流域川づくり懇談会）
須貝 郁子（飯坂 白子川と湧水の自然を守る市民の会）
毛利 将範（エコシティ志木）



新河岸川流域図

■ 主旨説明

- これから2点、話してもらいます。
- ① 川に学ぶという視点での各団体の活動紹介。
 - ② 生涯学習や学校などで川や地域についての学ぶときに、各団体がどのようなサポートができるのか。

■ 各団体の活動報告

□ 不老川流域川づくり市民の会

- ① 不老川の川歩きマップの作成や歴史・文化の学習会の開催、環境学習への参加等を行っています。昨年は夏に「大森の池まつり」も開催しました。
- ② 大森調節池へ産卵のために集まるカエルを交通事故から救うため、トンネルを作りました。この池には多くの生き物がすみ、ビオトープの見本として広く紹介していきたいです。

□ 砂川掘流域川づくり懇談会

- ① 「砂川」と呼ばれる川に戻すため、広い範囲で川を考え、植生調査やホタルの観測、農家との連携などの活動をしています。
- ② 都市計画決定された公園に、砂川掘も一部含まれており、公園計画に市民も農業や雑木林について考えながら参画する予定です。子供と一緒にフィールドワークも行いたいです。



写真：0Pを使っている発表風景



写真：発表風景

□ 柳瀬川流域川づくり市民懇談会

- ① 柳瀬川流域には、清瀬せせらぎ公園、河畔林を保全した洲の森があり空堀川では夏祭りを、北川でも夏祭りや学習会、かっぱウォークや狭山丘陵でも活動が行われています。
- ② 学校の授業への参加や、かっぱウォーク、水質調査、子供と一緒に川に入った活動などが行われています。東村山市では市民と行政が連携し「みどりの乗校」計画も進んでいます。

□ 黒目川流域川づくり懇談会

- ① 自分たちの川がどうなっているか川に入って見てみようというのが、活動のキーワードです。夏には上、中、下流で川遊びを行っています。
- ② 地域の人が学校へ講師として訪れても、それに対する学校のケアなどが整っていない現状に対し、東久留米市では、資金など学校と地域が連携する支援制度が検討されています。

□ 飯坂 白子川と湧水の自然を守る市民の会

- ① 白子川は湧き水が多く、湧き水地点には、稀少生物もいます。湧き水に関する生活について聞き取りなどの活動をし、流域としての保全に向けて懇談会準備を進めています。
- ② 継続した水質調査や、自然環境調査が行われて、大学生と共に親水公園化も提案しています。

□ エコシティ志木

- ① 舟運の歴史を見ながらの川歩き、オオバクサの刈取りや水質調査、親子での遊びも含めた河畔林の手入れ、プールのヤゴ救出作戦などを、子供達と一緒にしています。
- ② 舟運の復活を子供たちと連携したり、掘堤や水塚など水害から守る暮らしの跡が学べる場、学校を子供の運営する博物館にしたエコミュージアム構想などが考えられます。

■ 今後の新河岸川流域での展開

発表をまとめると、以下の3点になると思います。

- 1) 子供も大人も地域の生きた情報を集めるために流域に拠点をつくり、更につなげる。集めた情報から、地域や川をどのように良くしていくのか、地域を具体的に良くする行動のプログラムが流域で考えられる。
 - 2) 新河岸川流域の活動をサポートする新所沢事務所のような拠点を上手く活用し、ネットワークをつくっていくことが求められる。
 - 3) NP0などのプログラムも事業として考え、そうした時に、地域にいる人やさまざまなメニューが学校に対して公開される仕組みが必要となる。
- フォーラムに参加した方々から手をつなぎ合い、総合的な学習や、地域の生涯学習の活動の中で、新河岸川流域での川と流域に学ぶ活動を提案し、楽しい活動を展開させてほしいです。

第1分科会 流域から学ぶ、まちづくり・川づくり

コーディネーター：松下 潤

(芝浦工業大学システム工学部環境システム学科教授)

パネリスト：天田 真 (エコシティ志木)

菅谷 輝美 (黒目川流域川づくり懇談会)

小林 一也 (黒目川流域川づくり懇談会)

松尾 初美 (砂川掘流域川づくり懇談会)

舛原 邦明 (東京都建設局河川部計画課)

篠塚 正行 (埼玉県新河岸川総合治水事務所)



写真：会場風景

湧水保全にむけた市民提案 落合川の事例

東久留米にある落合川の約12年間の経緯を話しました。平成2年、工事着工が看板で市民に提示されました。その工事に對し、市民は何もできず、シンポジウムなどを開き、行政や学識経験者と一緒に話し合いを続けました。そうした経緯から、東京都が市民へ相談を持ちかけ、市民が河川の構想絵を描き、出来上がったのが思いの水辺事業です。現在は工事の始まる前に計画が市民に提示され、話し合いが持たれています。市民も勉強を積みながら、今後は市民と行政が同じ土俵で話し合う仕組みづくりも必要です。

市民参加による黒目川改修計画策定

黒目川の改修計画について住民参加で、2000年の1月から話し合いが持たれました。市民の意見をふまえ、川全体の底を、川の蛇行した形で掘り下げた工事に決まり、内水氾濫の危険性が減りました。更に、堤防の段差について問題が生じましたが、堤防を高くすると危険があるため、できるだけ堤防を高くしないことになりました。市民も勉強をし、自分の考え以外の部分も含めて考えること、行政も市民と問題を共有しようとする必要だと思えます。

市民の農地への関わり

砂川堀上流部の農地で農業を体験しながら、砂川堀の植生や生き物、農地を含めた流域のあり方を考えています。川の存在も含めた、自然や地域に学ぶ資源を残した公園計画に向けて、市民で話し合っています。

これからの河川整備について東京都

東京都の河川事業は、洪水などから人々の財産や生命を守るというのが基本方針で、それと水と緑のオープンスペースを作っていくと頑張っています。今後、河川は東京都と市民、団体の方々、流域の区市町村で流域連絡会を立ち上げ、より良い河川をつくっていくこととしています。東京都の水循環マスタープランには課題と、具体的な政策をまとめ進めています。

これからの河川整備について埼玉県

埼玉県の河川事業は、水害に強い川づくりが第一にあります。それから環境、自然と人にやさしい水辺空間の改善、また次世代へ引きつぐ人づくりとして交流推進を行っています。都市化に伴う対策として総合治水対策や、雨水貯留施設整備、流出抑制、予想区域の公表なども行い、各戸貯留事業として、新設者の各個人には、県の方が全額負担し、雨水浸透マスを設置しています。また、荒川流域未来会議も進めています。



写真左：
コーディネーター
の松下潤氏

写真下：発表風景



第2分科会 川で安全に遊び、学ぶために

コーディネーター：小谷 寛二

(呉大学社会情報学部教授)

パネリスト：小川 信次 (財)河川環境管理財団)

南谷 辰夫 (NPO法人 JpSART)

森内 京子 (北川かっぱの会)



写真：会場風景

人間の方でコントロールすることのできない自然の川。
そこで、安心して、学習や遊びをするには、
どうすれば良いのでしょうか？
子どもたちを川へ連れ出すために、まずは、大人の学習も大切です。

分科会の目標

川で安心して子どもたちが遊べて、安心して大人も指導できるための条件や方法を探り、どういう仕組みをつくれば良いのか、また刑事責任や民事責任とはどういうことなのか、更に賠償金に対する保険制度などを含め、広い範囲で考えます。

危険防止措置の方法や方針の紹介

川では、必ず事故が起きることを念頭に置き、ライフジャケットを絶対に付けさせることを提案します。また子どもの川への親しみ方と同時に、危険に対処するプログラム(安全教育)を環境教育のなかで取り入れていくことが必要です。大人も危機管理や、安全対策のトレーニングも行い、ロープを投げる救助法は、遊びのなかでもやってみることが大切です。それらはシンプルであるが故に使うための努力が必要なのです。

『初めての川遊び』とその仕組み

きちんとした知識と経験を持った指導者の輪を広げるために、川に学ぶ体験協議会が設立され、同時に活動者や指導者の保険制度等をつくる準備も進めています。『初めての川遊び』は、川の基本を少し読み物ぶろにまとめました(現在、編集中)。この冊子に合わせ、講習会も開く予定です。今後、知識と体験に指導者を多く世の中に送りだしていき、そしてひとりでも多く仲間とともに子供たちを連れて川へ行ってほしいです。

「事故責任のあり方」の現状と課題

リスクマネジメントについて、以下のようにまとめます。

- ①危険なものは中止する。中止ができない場合は、小さくする。例えばライフジャケットがない場合はグループを小さくするなど。1人の指導者に8人迄。
 - ②自分で危険を予防し、回避できる能力を、大人も子どもにもつけさせていこう。
 - ③リスクを分散させること。
1. 法的な責任を問われても、安全教育をしておくことで、2割の過失が相殺される。
2. 参加する相手に危険を承知で引き受けてもらうことで、1～2割の過失が相殺される。
3. 保険に入る。全額支払われなくても、自己負担額は小さくなる。
- 以上の3つのことは、現実問題として、自然という私達にはコントロールできない川で遊ぶ以上、最低限行わなければならないことです。

仕組みとしてどうするべきか

市街化区域の河川では、ネットが張られるなど遊びにくい現状で、子供だけでは遊ばせることができません。子供たちが川遊びの集団をつくるようになるまで、何年かかっても、指導者を付け、大人が率先してリードしていく必要があります。また、大人もその訓練を受け、その指導する人に損害賠償責任がかからないように、あるいはリスクが小さくなるようなことを考える必要があります。



写真上：コーディネーターの小谷 寛二氏

写真下：『初めての川遊び』を紹介する
小川 信次氏



写真：JpSARTからライフジャケットの提案と、
(下)ロープによる救助のアドバイス。



第3分科会 子どもたちからの提案

コーディネーター：森 良氏

(環境教育情報センター事務局長)

子どもと大人と一緒に、川でやりたいことを出し合い、何かをやっていく上でも一番大切な夢を持つことが目的でした。楽しい笑い声が響く会場から出された自由な提案を、みんなが川や流域へ飛び出し、実現されることが楽しみです。

ワークショップの説明と自己紹介

まず全員が円い輪になるため、ジャンケンをして負けた人は勝った人の後ろにつくという「ジャンケンチャンピオン」ゲームをしました。うまく、1つの輪になったところで、一人ずつ自己紹介をしました。

動機付けのゲーム「水の旅」

「水の旅」のゲームでは、一人ひとりが地球上の「水」になりきります。水の姿、つまり水の移動場所は全部で8通り(植物、湖、土、海、川、地下水、雲、動物)です。サイコロを振り出した目の場所に移動します。水の姿はサイコロの目によって決まるのです。どこを通ったかメモしておき「水の旅」のお話をつくりまします。みんなの「水の旅」から、自由でしかし過酷な水の姿が見えてきました。ある水は湖で野うさぎ君に飲まれ、再び尿として湖に戻り、蒸発して空で暮らしている、神様が「嵐を起こします、雨になって下さい」と言われ雨になり海に行くのです。またある水は琵琶湖から始まり、赤潮のせいでナイスパティがボロボロになり、苦難の道を雨仲間や農家のお

じさんと出会いながら旅を続け、今は仲良くマリモと阿寒湖で暮らしています。北海道で暮らす水がいれば、沖縄の土の中から蘭の花へ移動し、蘭が出荷され、東京へ行く水もありました。

川でやってみたいことの提案

身近な川ごとにグループをつくりまします。まず一人ずつカードに、川でやってみたいことを自由に書きます。次に、グループの中で順番に、自分の書いたカードの中から1枚選び、読み上げて模造紙の上に貼ります。その内容に関係のあるカードを持っている人はその周りに出します。2番目の人も同様にカードを読み上げて、その内容と関係のあるカードを出していくとカードの鳥ができます。全部のカードが鳥に分かれたら、その鳥を表す言葉をつけ、みんなの提案を整理します。

大人グループには、子どもたちのやりたいことを実現するために何をしたら良いか、課題を様々な立場から書いてもらいました。責任を持とうとする、書けなくなるので、肩書きをはずして責任を持たないというルールで、アイデアが出されました。

発表と共有

子どもたちからの提案は「ばてるまで泳ぎたい。寒中水泳。川の流れに逆らって川を昇る。体ごと流れる」など体当たりのものから「川の生物なりきり大会。石(水切り)合戦。灯ろう流し。笹舟流しで競う。いかだ大会」などイベントの提案。日常的なこととして「川の水の音を聞く。川で歌う。川沿いの散歩」などがありました。「ボートやヨットで遊ぶ。カヌーで川下り」など舟を使用した遊びや「流づきり。水力発電」など建設的な提案。生き物について「虫を捕まえる。鳥の観察。魚と友達になりたい。河童に会いたい。魚を釣って焼いて食べる」などがありました。特に「魚を釣って食べる」と、魚が減っていくのであまり良くないと思います」という意見や、「流はどの位の大きさなんですか?」という質問に対し、「1mあれば...1mは高いだろう」「じゃあ30cm」「30cm?それって流っていうの?」「流れていれば流です」というやり取りもありました。大人グループからは、子どもと一緒に、先頭きってとにかく遊ぼう!そのための仕掛けを考えることになりました。

第4分科会 学校の取り組みと、川に学ぶプログラム

コーディネーター：堂本 泰章 (財) 埼玉県生態系保護協会事務局長)

報告者：八木 敦 (荒川知水資料館長) 国吉 良輔 (エコシティ志木)

正田 浩司 (新座北高校) 茂木 裕二 (三ヶ島小学校)

矢野 淳子 (自由学園) 丹野 忠弘 (所沢北高校)

神沢 志郎 (柳瀬川流域川づくり市民懇談会)

地域と学校が連携した活動の可能性を探るため、新河岸川流域の学校で実際に利用されている川を利用した活動が発表されました。流域の拠点を中心とした幅広いネットワークづくりにより、活動がさらに発展する確信が得られました。

『荒川知水資料館を活用した学習』

荒川知水資料館は、荒川下流域の流域センター的な役割として期待されており、定期的に催されるワークショップやまた総合的な学習の支援について報告しました。特に、展示物だけではなく、子どもが自ら設定したテーマや問題を解決するためのお手伝いは、流域に根ざした施設ならではの支援です。

『プールのヤゴ救出作戦』

志木市立志木第二小学校 (志木市)

子どもたちの一番身近なプールからヤゴを救出し、そのヤゴを学校や家庭で育てることで、家族で生き物の感動を共感するとともに、環境に対する学習が、学校から家庭へ、家庭から地域へ広がるよい機会になります。ヤゴを通して、志木市内の小学生との交流が深まっています。

『武蔵野台地の教材化について』

埼玉県立新座北高校

武蔵野台地全体の広がりだけでなく、川とのつながりを生徒たちだけではなく、地域の市民団体などより多くの人たちと共有しています。授業では、実際にフィールドを歩いたり、自然の歴史を考えながら、環境問題に結びつける工夫もされています。

『見たい、知りたい、三ヶ島の自然』
所沢市立三ヶ島小学校

子どもたちが東川、砂川掘の源流やお茶について調べ、ホームページを作成しています。また、質問を市役所に問合わせたり、先生方も学区内を歩いて発見を重ねるなど積極的です。下水の混じる汚れた東川、砂川掘についてインターネットで情報交換をしながらかをきれいにすることが目標です。

『せせらぎ公園を中心とした学習』
清瀬市立第四小学校

清瀬せせらぎ公園というビオトープと川が一体になった恵まれた学習環境で、清瀬第四小学校の授業は進められています。市民が先生として授業へ訪れるなどのソフト面と、公園と言うハード面が備わっているため、今後、展開が期待できます。

『校内を流れる立野川からの学習』
自由学園 中等科

湧き水を集めた立野川が校内を流れており、その学習から流域全体へ興味広がっています。「川を計る」というテーマで実習を行い、流量測定、地下水測定の装置や設備も作りました。また、水質調査は立野川だけに止まらず、荒川や隅田川へも広がりました。



写真：流域での活動が書き込まれた地図

『身近な川の一斉調査を通して』
埼玉県立所沢北高校

川の水質調査から、川の汚染源に目を向けたり、生徒と実際に川を歩くなどの活動をしています。また、川を総合的に表現する数値として、川の自浄作用に注目した取り組みを紹介しました。化学式や数式から身近な環境を見る学習として大きな可能性が広がります。

『川についての学習に関するアンケート』

アンケートから分かる、学校が必要としている情報や困っていることは、今後、市民団体や行政が地域での取り組みを考える上で、活用できます。この結果を参考にしたり学校も地域もできることを探し、工夫できると良いです。

新河岸川流域での展望

学校の取り組みを知ると、学校にこそ情報が集まり、大人もその情報も利用し、勉強にもなります。また、小学生、中学生、高校生の各々が取り組んでいるプログラムを互いに共有することで、さらに発展できることも参考になりました。こうした学校の取り組みには、核となる拠点やコーディネーター人材も、今後必要となります。



写真上：みんなで輪になって自己紹介。



写真右：どんなアイデアが描けたかな?



写真中央：発表の様子。

写真上と左：川でやりたいことを書いて貼っている。



写真：発表の様子



写真：自由学園の発表。立野川の河床縦断面図

こんな場面もありました

新河岸川流域での総合治水対策や、市民の活動などが分かる展示も行われました。参加者と市民団体が交流できる場にもなりました。

また、荒川の河川敷の雑草を活用した「荒川緑肥」も配付されました。



● Information ●

井戸と水みち 井戸端会議

●第1部 井戸端会議

話し手 井戸掘り職人さんや
井戸を使っていた方たち

●第2部 講演「多摩の水みちを調べて」

話し手 水みち研究会代表 神谷 博氏

不老川流域の入曽で、井戸端会議が行われました。戦後、昭和30年頃に上水道が普及すると井戸の存在は忘れられていきます。しかし、乏水地域と言われるほど、水の少ない地域で井戸は欠かせず、生活と文化を支えるものでした。その井戸の文化を語り継ぐために開催されました。

日時 平成13年 3月4日(日)

午後1時～午後3時30分

場所 狹山市人間公民館

主催 不老川流域川づくり市民の会

井戸の水汲みが女性の仕事であったことや、その時間などは農業と深く関っていました。また、井戸大家と言われるお宅の井戸を十件ほどの家が共同で使っていました。水が少ないため、井戸も深く、渇水期には井戸さらにも協力して行われました。

第2部では、井戸を考える上で重要な地下水についての講演でした。水みちは、良い水も悪い水も集まる水の流れであり、それは自然にでき



写真：井戸のつるべを回して、昔の井戸を使った生活の話を聞きました。

るものではなく、つくられるものであることや、聞き取り調査の様子などについてお話がありました。

流域を考えるには、川を流れる水だけでなく、見えない地下水の流れも大切であることが確認されました。

春のイベント情報

3月

水と緑の学習講座 第11回

『雨から考える水・緑・まち』

日時：3月17日(土) 13:30～16:00

場所：東村山市ふるさと歴史館

資料代：100円

問合先：東村山市みどり公園課

☎042-393-5111

99年度新河岸川水循環ワークショップ

「風土グループ」新河岸川の舟運を訪ねる旅 第4弾

新河岸川のはじまり 小江戸川越を歩く

日時：3月31日(土) 09:30 集合

集合場所：東武東上線 新河岸駅 東口広場

連絡先：森 (ECOM) ☎03-5982-8081

大河原 ☎070-6113-8110

4月

新河岸川水系水環境連絡会総会

日時：4月1日(日) 10:00～

場所：朝霞市産業文化センター

新河岸川水系水環境連絡会花見会

日時：4月1日(日) 12:00～

場所：黒目川東上線支流

『川づくり/清瀬の会』設立総会開設

日時：4月15日(日) 13:30～16:30

会場：生涯学習センター(アミュー) 6F 講座室

問合先：神澤 志朗 ☎0424-91-2348

● 事務局から ●

新河岸川流域フォーラムには、たくさんの方が参加して下さいました。いろいろな形で、皆様にご協力頂き、ありがとうございました。フォーラムを通じた出会いが、今後の新河岸川流域での活動に反映されることを期待しております。